

タッチの差でいつも負けてる家系の譜 伊藤三十六

- ・ 「負けてる」は「い抜き」表現ではないか、「ら抜き」同様気を配るべきでは。
- ・ キャリアとノンキャリア的なものを感じる。
- ・ アメリカのような歴史の浅い国でも家系を重んじるところがある。歴史が無いから余計そうなのかもしれないが、ブツシュ家、ケネディー家、次期大統領選挙が噂されるクリントン元大統領婦人ヒラリー氏など、指導者の資質に血筋のようなものを求める反面、一市民としての感情を思い浮かべた。
- ・ 「隣の芝生はよく見える」的解釈だと面白い。

井戸堀が消えて下流が溢れてる 中島 宏孝

- ・ 昔の政治家は、政治に資財を投げ打ってしまって、文字通り井戸堀状態になったというが、それが消えて「下流が溢れる」つまり「庶民の暮らしが不自由になる」というアイロニーがいい。

ライバルにしては相手が強すぎる 山口 千枝子

- ・ 強すぎると、ライバルだと思っているのは自分だけで、滑稽な状態。

おばさんが走るのバス走れない 植竹 団扇

- ・ 地方都市ののんびりとした風景だと思う。
- ・ 都会でもこういう光景は見かける。むしろ都会だと見る事で、下五「走れない」が際立つ。

結び目を解いた姑の割烹着 白勢 朔太郎

- ・ 姑が嫁を認めた瞬間か。割烹着を解くという事で台所における力関係が変化したとを感じる。同時に、まず「台所」という意地悪な見方をすると、財布の紐はまだ姑にあるという意味でこれも面白い。

ハズされるらしい梯子は昇らない 五十嵐 淳隆

- ・ マスコミをまずイメージした。梯子を立てても、外しても視聴率につながるからだ。だから作者は上らない。
- ・ 「豚もおだてりゃ木に登る」というがそれに似て面白い句。

・
何気ない一言付いて離れない 村田 倫也

- ・ 言ったことか、言われた事か、二通りに楽しめる作品。こういう慙愧な思いは誰にもあることで、そこに気がつき句にしたのがいい。

帯揚げで勝負の姿ととのえる 葛西 清

- ・ 踊りの師匠、お茶かお花か、とにかく伝統文化にかかわっている指導者の方の姿を思う。「戦闘準備完了」といったところか。

甲子園ハトとび立ちて原爆忌 坂倉 敏夫

- ・ 甲子園で黙禱をするのは終戦記念日。原爆忌には黙禱をしないので、時間的にずれているのでは。
- ・ 原爆忌に黙禱をしたいといった生徒が、主催者側に止められたという事が去年あった。
- ・ 夏の甲子園大会中に原爆忌は来るのだから、不自然ではない。
- ・ 甲子園と原爆忌が八月である事と、平和のシンボルであるハトとの取り合わせで理解するべきではないか。

感謝する心しあわせ向いてくる 新澤 きよ

- ・ 意地悪な言い方かもしれないが、誰が聞いても「そうですね」と否定できない内容では句として弱いのでは。
- ・ 何時も何かのおかげ様という心でいることは大切だと思う。

健康は買うものらしい高齢化 松橋 帆波

- ・ よくある句。
- ・ 「健康」と「健康食品」の微妙違いでこの句の感じ方が違ってくると思う。

さばをよみエトを問われてトシがばれ 八木 柳雀

- ・ 年を誤魔化していても干支を問われると正直に話してしまうもの。そこで本当の年がばれてしまう。しかし、そのためには干支を聞いたほうも干支で年齢わかっていなければならず、現代ではどのくらいこういう光景が起きているか疑問。
- ・ 干支を聞かれたら聞き返して、それにあわせて答えればいい。

・
挑戦のこころ先入観は消す 太田紀伊子

- ・ 最初からゴールを決めてしまうとそれ以上はなかなか到達できないということ表現している。

- ・なるほどという感じ。句としては弱いかも。

屈折をする子の笑窪誉めてやる 小倉 利江

- ・上五が分かりにくい。
- ・はにかんだ時に出る笑窪なら、その瞬間その子の感情の本音の部分が垣間見られたと解釈していいのではないか。

赤ん坊増えてますよと軒燕 棚瀬 くんじ

- ・軒下の巢に一生懸命親燕が餌を運んでいる風景を見ると、ちゃんと子燕が育っているのだなと微笑ましく思う。それも子沢山なら尚いい。

靖国のメモが惑わす総裁選 小林 寿子

- ・時事吟だが、上五「靖国のメモ」という言葉は賞味期限が短いのでは。
- ・昭和天皇のA級戦犯合祀に対する感情をつづったメモが見つかったという事柄を、この上五でどのくらいの期間思い出す事ができるか。

その辺が表現の難しいところだと思う。

- ・内容は時事川柳としてはいいと思う。

帯紐を解くと優しい母の顔 江崎 紫峰

- ・帯留なら分かるが、帯紐を解くと着物が脱げてしまうのでは。

死亡届けあっけないほど薄い紙 井手 ゆう子

- ・家族を亡くした人にとって、死亡届ほど哀しいものは無い。確かに役所の仕事だから、手続き上決まっているのだが、「人間が死ぬ事ってこんなにあっさりしているの」と思ってしまうほど、死亡届の紙は果敢無い。

原巨人見ざる聞かざるあいた口 伊藤 弘子

- ・三猿にかけているのだろう。あちらは「見ざる言わざる聞かざる」今の巨人軍は開いた口がふさがらないくらい弱くて、見たくも聞きたくも無い。ファンにすれば当然の感情。

イオン水勝って来るぞと喉を行く 五十川 三竿

- ・「勝って来るぞ」は「買って来るぞ」と掛かっているのか。

- ・ 朝起きて健康にいいイオン水をコップ一杯飲み干して「勝って来るぞと」と家を出る。今日の仕事への気合ではないか。

携帯を片手に片手間な会話 山口 兄六

- ・ 何かやりながら、例えば誰かと話しながらも携帯が鳴ると出てしまう。
- 物を買いに言って店員にこれをやられたら嫌だ。でもこういう風景が多い。
- ・ 携帯は便利な反面、面と向かって会話をするときの人と人との関係を壊している。

レモネードあの日弾けていた僕ら 加藤 鯉

- ・ レモネードってどんなのだったかしら、レモンティーと似ているのかしら
- ・ 「僕ら」が「二人」ならどうか
- ・ 精神の甘酸っぱさが感じられてステキな句。